だんぶり長者伝説

神秘的な変身や壮絶な闘いを伝える八郎太郎伝説に比べ、だんぶり長者伝説は穏やかでほんのりとした物語である。

むかし小豆沢（あずきざわ）の根本というところに、長牛（なごうし）から婿にきた若者が年とった父親と暮らしていた。正直で働き者だったが、いつも貧乏だった。一方、比内（ひない）の独鈷（とっこ）という村に十六になる親孝行な娘がいた。両親が亡くなり悲しみにくれていると夢に白髪の老人があらわれ、川上へ向かうと一人の若者に会う、その者は人の二倍も働き者に見える、その男と夫婦になるがよいと告げた。言われた通りにして小豆沢にたどりつくと、一人の若者が柴刈りをしており、一本刈ると二本倒れ、二

本刈ると四本倒れる程の働きぶりだった。夢の話をすると男は娘を家へ連れて行って夫婦となり、仲良く暮したがあいかわらず貧乏だった。ある年のこと、神に供える餅も酒もなく若者がため息をついていると夢枕に老翁が現れ、我は大日神である、川上へ行き広いところに住むがよい、そうすれば長者となるだろう、と語った。妻も同じ夢を見たというので、次の日男は老父を背負い、女が物を持って川上へ向い、田山の奥の平間田という村で田畑を開いた。

夏の暑い日、畑で働いていた男がうとうととしていると、だんぶりが飛んできて唇にしっぽをつけ、二回も三回もくり返した。目をさました若者はうまい酒を飲んだ夢を見たと言い、だんぶりの飛んでいった方へ行ってみると香りの良い泉がこんこんと湧いていた。飲んでみると本当にうまい酒で、飲んだ人は病気が直り、長生きできた。夫婦は国一番の長者となって大きな屋敷を建て、集まってきた人たちが食べる米を朝晩とぐとぎ汁が川下まで白く流れ、その川は米白川（旧米代川）と呼ばれるようになったという。

さて二人はどんな望みもかなえられる身の上になったが、四十すぎても子供ができなかった。そこで大日神に祈願すると女の子が一人生まれ、かしこくかわいらしく育ち、秀子とも桂子ともよばれた。夫婦が長者の号を拝領するため桂子を連れて都へのぼった時、娘は天子の目に止まって宮中へつかえることになり、吉祥姫と名を変えて後には后となった。

そのうち長者夫婦は亡くなり、宝の泉もただの水となって大勢いた人々もばらばらになってしまった。吉祥姫はそれを悲しんで天皇に願い、長者が尊んでいた大日神の社を古里に建てる許しを得た。そこで継体天皇十七年の年に小豆沢に大日堂が建立された。大日堂の祭堂が正月二日に行われるのは、長者が夢のお告げを受けた日にちなむとされている。

吉祥姫は亡くなる時に古里に埋葬してほしいと言い残したため、大日堂の近くに墓を作りイチョウの樹を植え、吉祥院という寺が建てられた。五番目の皇子で五ノ宮皇子とよばれた子供は母親をしたい鹿角までやって来て、大日堂の後ろにそびえる山へ登りそのまま姿を隠した。この山を五ノ宮嶽とよび、その乗馬が石になったものがばくだ石、お供の兄弟がやはり石になったものが一の皇子（皇子石）、後から皇子を捜しに来た乳母夫婦が変わった石が夫婦石などと呼ばれ、今でも登山道にある。

（『大日堂由来記』等による）